



TITLE:

聖書翻訳者ブーバー(Abstract_要
旨)

AUTHOR(S):

堀川, 敏寛

CITATION:

堀川, 敏寛. 聖書翻訳者ブーバー. 京都大学, 2019, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2019-09-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13273>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	堀川 敏寛
論文題目	聖書翻訳者ブーバー		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>序論 ブーバー研究の現状と方法論</p> <p>21世紀のブーバー研究は、ブーバー学会誕生と新版ブーバー著作集MBWの刊行開始により、1960年代に確立した視点の脱構築と再構築を、まず主眼になされねばならない。第一に限られた情報から導き出された対話の哲学者という安易なブーバー像の再検討、第二に作為的に消された箇所がある旧版著作集<i>Werke</i>の見直し、そして第三に絞られたテーマの中から新たなブーバー像を発見することである。これらの視点を現在の研究者が達成するためには、現在はトータルなブーバー像探求ではなく、23巻の新版著作集の読解と評価による特定の分野における新たなブーバー像の発見を試みなければならない。</p> <p>第一編 我－汝から聖書へ</p> <p>本編では、ブーバー研究者ライナーの解釈「ブーバーにとって〔中略〕基礎的存在論的な考察と『あらゆる存在者と共に在るそれぞれの人間の生活における根元的態度』が重要なのである」が提題として挙げられ、果たしてブーバーは存在論を目指していたのか、という主導的問いが論者によって立てられる。第一章三節の中でブーバーは狭義の哲学理解から、それを客体化・対象化また抽象化と問題視したことが述べられたが、つまるところブーバーの意図は、著作『我と汝』のみならず第一編第二章二節で論じられるように『神の蝕』の根本的原因でもある我－その問題性を指摘することであった。ブーバー我－汝思想は、狭義の哲学である形而上学や存在論によって代表される我－その思考法を脱するために「決してそれに転ずることのない永遠の汝」である神の体験なくして、存立し得ない。それゆえ第一章から第二章にかけて、ブーバーの思索は、我－汝と我－それという二種類の関わり方による基礎的存在論の展開ではなく、むしろ我－それを打破するような我－汝関係の始原性に重点を置いていたことが示される。すなわちブーバーは人間存在を分析する哲学的人間学を通して、より根源的な我と汝の始原的結びつきを描写することが目的であり、我－汝と我－それによる二つの関係性はその現実を示すための説明方法であった。その事態を、研究者バローは「ブーバー哲学の主発点としている基礎経験は、哲学の外での経験である、つまり宗教的経験である」と述べ、ブーバーの思索が哲学外の宗教的経験を基として成立することを主張する。このように我－汝思想が存立し、神の蝕が克服されるためには（第二章三節）宗教性が要求される（第三章二節）。この事態は、先</p>			

行研究ではハシディズムを通して論じられることもあるが、論者はこのバローの言説を支持するかたちで、第一編の我－汝の基礎論から第二編の聖書翻訳論を主題として選択したわけである。なぜならば、汝としての聖書を読解することが、神による語りかけの先行性を裏づけ、それを享受する宗教的体験の中で、読者の我－汝的態度が獲得されるからである。

ブーバーは哲学者というより哲学的人間学者、もしくは宗教的倫理思想家である（第三章四節）。人間存在一般を、我－汝/我－それという様態として基礎づける哲学的試みは、ブーバーの意図ではない。この点こそ、モルデカイ・カプランが「ブーバーは哲学大系の構築を目指していたわけではない」と、評した理由である（第三章二節）。ブーバーにはその思索の出発において、神と対面する実存を基礎にした宗教経験が明白にあり、それを表現するために使われた彼独自の概念が、我－汝関係や出会いであった。だからこそ、ブーバーの思想を追跡していくと、いつの間にかそれはハシディズムやヘブライ語聖書における神－人関係という宗教性へと行き着かざるを得ないのである。それはブーバー自身が、これらの中に我－汝関係の原型があることを示唆したかったからだと論者は考える。ただしその宗教性とは語りかけの受容や言葉との出会いであって、決してそれに転ずることのない汝との関わりが意味されている。したがって宗教性とは実定的宗教の中にではなく、ハシディズムの倫理や聖書の言葉を聞く中で求められる「関わりに対する日常的な専心」なのである。ブーバー研究が、普遍性を目指す哲学ではなく、宗教性と切り離すことができない人間の具体的状況を方法論の出発点とする根拠がここにある。したがって第一編の最後で見たように、ティリッヒがブーバー思想を「具体的普遍性」と評価したことは的確である。

第二編 聖書から我－汝へ

第一章から第四章にかけて、ブーバー/ローゼンツヴァイクによる翻訳聖書の誕生から完成までの生成過程、翻訳聖書の独自性、彼らの聖書翻訳の方法論が言及された。ブーバーの聖書翻訳の方法論には、彼独自のライトヴォルト様式という文学的批評法、R的・傾向史的分析という歴史的批評法、行為遂行的・変形成成的な対話法があり、これらは聖書解釈における共時性/通時性/外部性ないしは文学／歴史／対話の三次元的方向性によって構成される三次元構造になっている。そこではテキストの最終形態を大切にしながら、歴史的解釈の変遷を経ながらもなお維持されてきた統一性に敬意を払うものである。第四章「ブーバー方法論の聖書学的位置づけ」の結びでは、ブーバーの対話的方法論が聖書学で大きく二分された潮流である通時性と共時性を総合する可能性が提案される。

次に、翻訳箇所を分析することによって、ブーバーの方法論が実際に適応されているかが検討された。例えば、第六章のヤコブ物語や第七章のアブラハム物語における共時的な構造分析や形式的な用語使用を通して、ライトヴォルト様式の追跡法が見い

だされる。ただしこれら物語のみならず、第八章のイザヤと第二イザヤという時間的隔たりを内包する書の中でも、ライトヴォルトを追跡する手法によって、そこには一貫した思想があることが判明する。このような通時性の中で、ある種の統一化された傾向があることに敬意を払うのが、ブーバーのR的方法である。特に『神の王権』

『預言者の信仰』『モーセ』などのイスラエル信仰史が主題になっている著作では、R的・傾向史的分析方法がより中心的に取り扱われる。ちなみに本稿では後者の方法を採用する事例がライトヴォルト様式に比べて副次的に扱われているが、その理由は本研究では聖書解釈よりも聖書翻訳に焦点が当てられているからである。翻訳という作業は、伝承の生成過程というテキスト背後の歴史性よりもテキスト内部の文学的関連性がより重視されるものである。その中でブーバーは、彼なりの歴史性を表現した。それが先人達の様々な解釈を経ながらも変わらぬ統一的傾向であり、それを大切にする視座がR（ラッベーター：私たちの師）的方法や傾向史的分析法である。

更に、具体的な聖書箇所を採り上げ、そこで訳語の工夫が検討された。第五章で、これまでもブーバーの神名ヤハウエとエヒエの翻訳に関する研究はなされていたが、いまだ不明瞭であった我－汝との関連性が明確になる。また第六章ヤコブ物語と第七章アブラハム物語の解釈は、前者においてはブーバー自身の叙述が少なく、それに対して後者には多いのであるが、研究史の中では中心的に扱われてこなかった箇所であり、ライトヴォルト様式と我－汝の対話的原理が密接に関連していることが判明した。これらはブーバー自身が、自らの翻訳聖書朗読テープ作成のために選んだ題材でもあり、本人が主導的に解釈したものである。すなわちブーバー本人による聖書箇所の選好にこそ、ヘブライ語聖書を我－汝的に読解する姿勢が反映されている。具体的には、神名解釈を通して神の本性が対話的であることと、ヤコブ解釈を通してヘブライ的人間理解の本質が対面性にあること、そしてアブラハムのアケダー物語を通して預言者と神との関係が見て/見られる対話的相互性にあることが論じられた。

ブーバーの聖書翻訳と我－汝の対話的原理との関連性は、第九章「預言者の問題と翻訳の意義」を通して解明された。それは、聖書物語の場合と同様に、預言が私たちの日常にも現実化するという課題を解明するために、ブーバーは「万人預言者」という考えを持っていたという視点に基づく。ブーバー聖書翻訳の意図は、読者が聖書を媒介として、神的な声という「語られる言葉」と預言者の性的に出会うことである。ただし読者が言葉に対して我－汝の関わりをもって向き合わない限り、両者が出会うことはない。翻訳とはこのように言葉と読者の出会いを目的とした作業である。この目的のため、ブーバーはヘブライ語原語の持つ音韻構造やリズムカルな配置という文体や様式を崩すことなく、ドイツ語訳を試みたのであった。翻訳とは両者が出会うための道をつくることである。したがってそこから先は、万人が"いわば"預言者となって直接言葉を聴くという私たちの関わり方が重要になる。それを論者は、第二編第七・八・九章と結論で、ブーバーの預言者理解から論じた。すでにイザヤの中で示されてい

た「神の栄光は、全地に満ちる」という預言は、第二イザヤの時代になり、預言者に限らず万人が神の語りかけを受け入れることが可能となった。それは民数記の中で、かつてモーセが望んでいた万人預言者論が具体化したことを意味する。そもそも預言者の本質とは、自らの告知する言葉が民に受け入れられず、挫折することにある点が第八章五節で論じられる。というのも彼らは偽りの預言を告知する恐れがあり、預言の成就には危険性がともなうからである。ただし挫折した預言者たちの告知は、未来への希望としてその後も存続する。

第九章では聖書の理解と誤解を区別する客観的基準は存在しないことが論じられた。そもそも聖書言語は不変的なものではなく、読み手の受けとり方によって意味が変遷するものである。それゆえ、聖書のメッセージを、そのままそれとして受け取ってはならない。なぜなら聖書の中で語られる言葉は、ただ汝として読み手との関係の中でのみ、伝達されるものだからである。聖書翻訳者は、読み手に対して、あくまで語られる言葉への窓口を提供することにとどまる。読み手が直接的に神の言葉を受け入れるというブーバーの万人預言者主義は、ルターの言葉で表現するならば万人祭司主義である。ただし私たち読者が預言者になることはなど不可能である。というのもマラキを最後に、預言者は現代にはもう存在していないからである。それゆえ語られる言葉と出会うために私たちに必要とされるもの、それがまさに各言語へと翻訳された聖書なのである。

このように第二編を通して、ブーバーが聖書の中から捉えようと試みた根源的なものが、我－汝の関係性もしくは対話的原理であることが判明する。したがってブーバーの我－汝思想とは聖書の宗教性理解を通して明らかになる（第一編）と同時に、ブーバー自身が聖書解釈を通してその中にある我－汝性を表明している（第二編）ことが明らかにされる。このように彼の思想は「我－汝」と「聖書の宗教性」との循環関係の中にある。

(論文審査の結果の要旨)

マルティン・ブーバーは、20世紀を代表するユダヤ思想家の一人であり、その影響は、哲学や社会思想、そしてキリスト教思想にまで広範に及んでいる。現代のキリスト教思想は、多くの問題をブーバーと共有しており、キリスト教研究にとってもブーバー思想、たとえば「我と汝」の対話思想や「神の蝕」の議論などの解明は重要な研究テーマと言える。21世紀に入り、国際的なマルティン・ブーバー学会の設立や新版著作集の刊行開始など、ブーバー研究はそれまでの水準を超えるレベルで進展しつつあり、その中で、ローゼンツヴァイクとの共同作業として着手されブーバーによって完成された、ヘブライ語聖書のドイツ語訳（1925年から開始され、中断を挟み、1958年に最終版が完成）は、その独自の翻訳理論によって学的に高い評価を受けており、「我と汝」の対話思想との関連を含めた本格的な研究が始まっている。ブーバーの聖書翻訳理論と実際の翻訳作業とは、キリスト教における聖書翻訳あるいは翻訳理論一般にとって示唆に富んでおり、そこに聖書翻訳の可能性を確認することができる。本論文は、「聖書翻訳者ブーバー」というタイトルが示すように、以上のような新しい世界的なブーバー研究の動向を踏まえた、そしてそれをさらに進展させる多くの研究成果を含んでおり、優れたブーバー研究となっている。

本論文は、ブーバー思想の先行研究の分析とそれに基づく研究方法を論じた序論と最後の結論の間に、相互に循環構造をなす第一編と第二編が配置されているが、第一編には三つの章が、第二編には九つの章が含まれる。以下、本論文の研究成果より、特筆すべき点について説明を行いたい。

まず、序論では、これまでのブーバーに関わる先行研究が詳細に分析された後、さらに解明を要する問題点が列挙され、本論文の方法論と構成が論じられている。特に、先行研究の分析は、きわめて充実しており、今後ブーバー研究を行う場合には、本論文の分析を参照することによって着実な研究を進めることが可能になった。緻密な先行研究の分析に基づいて行われる問題設定は説得的であり、対話思想から聖書翻訳へと向かう第一編と聖書翻訳から対話思想へと向かう第二編からなる本論文は、ブーバーの思想世界を解明するにふさわしい構成となっている。

第一編では、ブーバー思想を有名にした『我と汝』（1923年）における対話思想が論じられるが、ブーバーの対話思想は、伝統的な形而上学的あるいは超越論的な思想としての「哲学」ではなく、むしろ、20世紀の哲学的人間学の問題意識を共有するものであり、その意図は、「神の蝕」に規定された現代社会を生きる人間に対して、「我と汝」の対話を回復されることにあり、論者は、この点でブーバーが「宗教哲学者ではなく、宗教倫理学者と呼ばれねばならない」と結論づける。こうして、ブーバー思想の根本的姿勢が明らかになった。

第二編では、第一章から第四章において、対話思想を具体化した聖書翻訳についてその基本的な諸問題（聖書翻訳の手法と方法論、聖書言語論）が論じられ、第五章か

ら第九章において、聖書翻訳の実例とそこに確認できる思想的諸問題が考察される。論者は、ブーバーの聖書翻訳の基礎論に関して、これまでの先行研究の議論を聖書翻訳手法の「三次元的構造」（テキスト内部のライトヴォルト様式、テキストの編集者である「ラビたち」が体現した共通の精神的雰囲気に基づく歴史的傾向性、対話的語りかけの生起）として集約した上で、ブーバーの聖書翻訳の特徴として、次の点を明らかにした。ブーバーは、聖書は本来朗読されるものである点に基づいて、この「声としての聖書」をその言語的形式（反復されるライトヴォルトにおいて見出されるリズムや韻といった音声的な特徴）を可能な限り忠実にドイツ語において再現することを目指し、その意味で過剰なまでの直訳を試みている。これは、キリスト教において聖書翻訳を論じる上できわめて示唆的である。聖書の言語的形式は思想的内容に対応しており、聖書翻訳の言語的形式に導かれて聖書を読み進めることを通して、読者は、神の語りかけに直面し応答を促されることになる。本論文では、この聖書翻訳の手法が、バベルの塔の物語、アブラハム、ヤコブ、モーセらの物語を実例として具体的に示されており、その論述は説得的である。しかし、本論文が特に注目するのは、万人預言者論を含むイザヤなどの預言者に関わる思想である。これは、ブーバーの思想が預言者的宗教を基盤にしているとの理解に基づいている。

本論文で問題となる預言者は、通常の前言者理解よりも広義に解されており、アブラハムを含むものであるが、本論文で論じられる思想理解は、神の言葉を取り次ぐ預言者の誤謬可能性、偽りの預言者と真の預言者との区別の基準といった問題へと、まさに預言者思想の核心にまで及んでいる。これは、聖書の言語的形式と歴史的傾向性との詳細な分析に基づいており、預言者の考察は従来の研究を超えて深められた。

このように本論文はこれまでのブーバー研究を大きく前進させる優れた研究であるが、単純な誤記などの修正すべき点以外にも、さらに展開し掘り下げるべき論点が見られる。たとえば、偽りの預言と真の預言とをわけける基準については、本論文の論述から判断して、神との信頼関係から、さらにその先へ、倫理性の問題へと追求することが可能であったと思われるが、本論文における議論は、やや図式的な理解にとどまっており、物足りなさを感じられる。しかし、こうした問題点については論者自身よく自覚しており、今後の研鑽において克服することが期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2019年6月27日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。